

平成二十九年 度

中世文学会春季大会

シンポジウム・研究発表要旨

「散文のなかの〈和歌〉」趣旨

司会 法政大学 阿部 真弓

和歌と散文。この二つは異なる姿と表現体系を持ちながら、一つの作品の中で共存し、連関する。殊更にあげるまでもないが、たとえば、物語や日記文学で和歌を持たない作品はないといつてよいだろうし、能の詞章や道行文の生成には、和歌が大きく関与した。歌集（家集）も、和歌だけが収められているものばかりではなく、散文で書かれた詞書、序や跋を持つものも多い。

研究の細分化と緻密化が進み、ともすれば、和歌か、散文か、それぞれの独自性に注目し追究しがちな傾向にある中、その折々に時宜を得て、あらためて和歌と散文の関係について問いかけ、考察すること、文学研究はより深められてきた。和歌と散文は、作品内部においてそれぞれどのような機能をもっているのか、表現・修辞の点で相互にどのような影響を与えてきたのか。主従か、補充か、対等か。融合か、複合か、対項か。文学研究の深化のために常に問い直されるテーマであり、時に、それぞれの研究の成果を踏まえ、作品やジャンルを超え、時代性や文学史という枠組の中で再考し続けていくべき課題であろう。

今回のシンポジウムは、和歌と散文の関係について、散文の作品における和歌、および和歌的表現を切り口として、近年の研究成果より見出された問題点を提示し、また新たな知見を切り拓こうとするものである。三名のパネリストには物語・軍記・説話研究の立場から、〈和歌〉に着目することで何が見えてくるのか、どのように読み直せるのか問題提起をしていただき、司会からも聊かなながら日記文学（紀行文）の問題に触れつつ、フロアとともに、一見古くとも常に新しく、魅力的なこのテーマに取り組んでみたいと考えている。

中世王朝物語と和歌

早稲田大学 新美 哲彦

作り物語は、よく知られるように、作中歌や引歌表現、歌語表現などの和歌的表現を通して、和歌の豊かな蓄積を散文に取り入れることで、表現空間を豊かなものにしていった。特に『源氏物語』では作中歌を含めた和歌的表現と散文部分が密接に関わり合い、物語を推進していく。

その作り物語は、平安時代においては、『源氏物語』以前、以降、鎌倉時代以降においては、『風葉和歌集』以前、以降で大きく四グループに分けられる。

では、鎌倉時代以降の作り物語（中世王朝物語）と和歌との関係はどのようなものであっただろうか。

一つづつの検討をするいとまも力量もないが、まずは、作中歌と引歌表現の量の変化を比較検討することで、平安期の『源氏物語』以前の物語、『源氏物語』以降の物語、鎌倉期以降の『風葉和歌集』以前の物語、『風葉和歌集』以降の物語の四グループの特徴と変化を概観していきたい。

さらに『風葉和歌集』以前・以降の作り物語における和歌的表現の質の変化を比較検討する対象として、『風葉和歌集』所載の、作中歌・引歌表現ともにバランスを保つ『我が身にたどる姫君』と、『風葉和歌集』に載らない物語から、作中歌数に比べて引歌表現の多さが目立つ『恋路ゆかしき大将』を取り上げる。それぞれの作中歌を含む和歌的表現の特徴や差異を見た上で、成立時期・成立圏を考えたみたい。

いくさの舞台と歌ことば

関西学院大学 北村 昌幸

中世の人々にとって和歌は心情吐露の手段のひとつであった。したがって、愛する者との別れや、世の移り変わりへの嘆きなど、彼らの感情の高まりを描くことの多い軍記物語というジャンルは、しばしば和歌の力に頼ることでその効果を上げていく。さらには、道行文と呼ばれる記事において、古歌の表現を利用しながら虜囚の足取りを描いていることも周知の事実である。『平家物語』灌頂巻にも数々の歌ことばが散見している。

ただし、軍記の軍記たる所以、すなわち合戦の場面に目を転じると、和歌および和歌的な要素は必ずしも多いとは言えない。源頼政の辞世歌などが有名であるが、「其時に歌よむべうはなかりしかども」と語られるように、それらはじつは例外的な逸話なのである。張り詰めた空気の充満する殺伐とした戦場は、本来は和歌からは縁遠いものだっただろう。

しかしながら（というより、だからこそ）あえて、いくさの場面における和歌的なものを取り上げてみたい。合戦のさなかに作中人物によって詠まれたとされる和歌や、いくさがもたらした光景を表象する歌ことば、そのほか関連事象の検討から、軍記特有の和歌利用のあり方を剔出することができるのではないか。そうすることによって、散文に寄与するツールとしての和歌の一側面が浮かび上がるはずである。

まずは、『太平記』の引歌表現を考察の起点とする。いくさが始まろうとしている場面において、その景観を表現するために、『太平記』はどのように歌ことばをちりばめているのか。この問題については、拙稿『『太平記』の引歌表現とその出典』（笠間書院刊『『太平記』をとらえる』第一巻所収）でわずかに触れたが、本発表で続論を展開したい。見通しとしては、『平家物語』『源平盛衰記』とも比較しながら、漢語が併用される傾向に着目し、和漢混交という現象を生み出す表現志向の問題にも視野を広げる予定である。

説話と和歌とはいかに結びつくか―『十訓抄』三舟譚の周辺―

山形大学名誉教授 菊地 仁

本シンポジウムでの私の担当を、「和歌」が「説話」でどう機能しているのか、と翻訳し、『十訓抄』の「和歌説話」を取りあげて若干の考察を試みたい。

正確な意味で「和歌説話」と呼びうるものは、「和歌」と「説話」との「混合物」ならぬ「化合物」であろう（拙著『職能としての和歌』）。もとより、自然科学と違い、この場合の「化合物」は、実験などによる明証性が確保される概念ではない。あえて言えば、「化合物」と認定するに足る解釈を提出できるかどうか、の方が重要となってくる。

今回扱う『十訓抄』巻十の第三、四、五話は、藤原公任・源経信・源俊頼という平安朝和歌史を代表する人物たちに関する「説話」である。周知のとおり、第三、四話は「三舟（船）の才」の故事として、史実の真偽を含め、さまざまに議論されてもいる。

これら三説話については、前掲拙著でも断片的にふれたが、依然として「説話」と「和歌」との関係を考えるうえで、なお発展性を持つ問題が潜在するように感じてきた。そのことを改めて強く意識したのは、迂闊にも読み逃していた、川平ひとし氏の「歌論用語の一基軸」(『新編日本古典文学全集 87・月報79』)に接したからである。

ここで私は、新資料を提示したり、事実関係を考証するのではない。あくまで、『十訓抄』において「化合物」の「和歌説話」が何を表現してしまっているのか、を検討対象とする。当面の論点は、藤原公任に対する評価、鶺鴒系定家偽書との交渉、という二項目で、最終的には、「和歌説話」における身体性とその比喻の役割へも言及してゆく。比較に供する主な作品は、『袋草紙』『三代集之間事』『撰集抄』『桐火桶』『楊鳴曉筆』などである。

これまでの自分の基本的な発想をあまり乗り越えきれてはいないが、そのぶん多角的に『十訓抄』三舟譚の周辺を掘りさげてみたいと考えている。

流布本『平忠盛集』をめぐる

早稲田大学大学院生 穴井 潤

平忠盛の家集は、流布本系と異本系の二系統に分類されるが、このうち流布本系については、もっぱら神宮文庫本を底本に用いて研究が行われてきた。神宮文庫本は、一九首の家集本体部分（A）に、為家筆本を「不違一字」書写したとの奥書（Y）を付し、さらに玉葉集までの勅撰集に見える「見勅撰歌」九首（B）を加え、全三八首で構成されている。

ところが今回、忠盛集の諸本をあらためて調査したところ、今治市河野美術館蔵の一本（二二二—八六八）は、Aと奥書Yに続いて、夫木抄および歌枕名寄から拾った七首（C）が付加された、全三六首からなる伝本であった。さらに尊経閣文庫本は、Aのみからなる伝本で、為家の墨痕を「臨贖」したとの寛文八年奥書（X）を付していた。以上の調査により、流布本忠盛集の諸本は、その形態から、新たに一類（A＋奥書X）、二類（A＋奥書Y＋B）、三類（A＋奥書Y＋C）に分類することができた。このうち、基幹部分のみからなる一類・尊経閣文庫本は、本集の原態を伝える伝本と認められる。

また、異同および仮名遣い等を検討した結果、神宮文庫本には誤写と考えられる独自異文が散見され、良質な本文と言いつても一方、尊経閣文庫本は、他本で欠損もしくは判読不能であった箇所も正しく書写されており、その仮名遣いも、アクセント体系変化以前の、定家仮名遣いに合致したものであった。為家は定家仮名遣いを遵守したとされるが、尊経閣本が素性の良質な本文を有している証左と言えるだろう。なお二類本中において、島原図書館松平文庫本には、神宮文庫本よりも良質な本文要素を見出すことができた。ともあれ、今後、本集の研究は、尊経閣文庫本に拠って行われるべきである。

二十八品歌の詠法―本歌取り作を中心に―

慶應義塾大学大学院生・日本学術振興会特別研究員 田口 暢之

二十八品歌は『法華経』二十八品の内容を詠んだもので、作例は平安中期から江戸時代に至るまで長期に亘って見られる。先行研究も少なくないが、特定の時代や歌人を中心として考察したものや二十八品歌から歌人の信仰を読み取ったものが多い。本発表では平安中期から南北朝時代の作を対象とし、詠法や表現技法の変遷を通時的に考察したうえで、特に本歌取り作の詠法に焦点を当てたい。

当初、二十八品歌は経典の句を直訳したように詠まれることが多かった。しかし、院政期あたりから経典に登場する人物の視点に立ったり、経典の内容を比喩的に表現したりする歌も見えはじめる。一方、本歌取りが和歌の技法として確立するのと揆を一にして、二十八品歌においても古今歌などの本歌取りが行われるようになる。たとえば、釈迦の叔母橋曇弥が授記から漏れたことを嘆く勸持品では「わが心なぐさめかねつ更級や姨捨山にてる月をみて」（古今集・雑上・八七八・読人不知）が院政期以降に多く撰取される。これは内容の類似が明白な本歌取り作であるが、新古今時代になると、詠作状況まで踏まえなければ勸持品との関連が読み取れない作も詠まれるようになる。

また、二十八品歌はそれ自体『法華経』という一種の「物語」に基づいて詠む和歌である。その詠法は『伊勢物語』や『源氏物語』を踏まえる方法、いわゆる物語取りの手法とどのような関係にあるのか。物語取りは新古今時代を中心に流行するが、二十八品歌では作り物語を典拠とする作はほとんどない。しかし、『尊円親王詠法華経百首』には『源氏物語』を踏まえた作が少なからず見られる。その多くは『源氏物語』から表現を撰取するのみに留まるが、中には内容的に関連する作もある。本歌や物語に基づく二十八品歌はあまり多くはないものの、二十八品歌においても本歌取り技法や物語取り技法の進展が認められるという点において注意される。

東山御文庫蔵『百人一首抄』について―三条西公条説の源泉と行方―

埼玉大学非常勤講師 酒井 茂幸

東山御文庫に『百人一首抄』と外題のある『百人一首』注釈が所蔵されている(勅封一一八―一一三)。従来の研究ではあまり注意されてこなかったが、今回やや子細に検討したところ、宗祇から三条西公条に伝えられた段階の説や公条が初めて考案したと思われる注が多く含まれていることが判明した。公条の説は京都大学附属図書館中院文庫蔵『百人一首聞書』(以下『公条聞書』と略称)が翻刻され(有吉保・位藤邦生・長谷完治・赤瀬知子編・百人一首注釈書叢刊2『百人一首類常聞書・百人一首経厚抄・百人一首聞書(天理本・京大本)』(和泉書院、一九九五))かなり明らかになっている。だが、同翻刻の解題でも指摘があるとおりに、承応元年刊の『和歌七部之抄』の「仍覚御説」として引用される注釈本文(後陽成天皇『百人一首抄』にも見える)とは多く一致せず、『公条聞書』は複数行われた公条の講釈の一回分があるいは仮に一回であるとしても全体像の一部であると推測される。こうした公条の説の実態解明のために東山御文庫本は多くの示唆を与えてくれる。

東山御文庫本には、複数の系統が伝存する宗祇の注釈には見えない宗祇や東常縁の説が見え、また「称名院」の言談が引かれるほか、『公条聞書』と本文が照応する箇所が少なくない。そして、『幽斎抄』と称される彰考館蔵の細川幽斎の『百人一首注』に影響を与えている。さらに、従来指摘があるが、後陽成天皇『百人一首抄』に「或抄」として引かれ、そのほかの引用形態をも含め実に八六箇所の記事の一致が見出される。その内「相伝の鈔」と称され引用される箇所があり、現存本が「明暦」印を有する後西天皇手扱本であることを勘案すると、東山御文庫本の親本は、元来から皇室か少なくとも堂上公家で相伝された本で、禁裏周辺の人物の手により筆録された注釈書ではないかと思われる。なお、本発表では東山御文庫等に所蔵される禁裏本の蔵書群をも視野に入れ考察を進めたい。

『徒然草』登場人物の家系からみた兼好と伊勢神宮の関係

栗田 進

『徒然草』登場人物の家系に偏りがある事はよく知られている。本論では、これが伊勢神宮関連の要職（神宮上卿・役夫工上卿等）に任ぜられる家系でもあることを指摘する。近年の研究によれば、これらの要職に就く人は、特定の家系から選ばれる傾向があるとされ、鎌倉・南北朝期で目立つのが、久我や西園寺・徳大寺の家系で、まさに『徒然草』登場人物の家系に重なるのである。堀川具守も、受諾しなかったが、役夫工上卿の候補に挙がっていた。

兼好と神宮の関係をみていくと、先ず『兼好自撰家集』から祭主大中臣定忠との交流が深かったことが知られる。

次に、『三宝院賢俊僧正日記』に、賢俊一行の神宮参詣（一三四六）で、兼好も急に同行した記述がある事から、兼好と賢俊の関係が窺えるが、太神宮法楽寺に滞在中、兼好は異例なほどの厚遇を得ており、兼好と神宮との特別な関係が想起される。賢俊は日野家の出で、尊氏の厚い信頼を得て後の日野家の栄達の礎を作った人であるが、尊氏等と共に兼好の詠歌もある『高野山金剛三昧院奉納和歌短冊』の巻頭には賢俊の歌が置かれており、兼好が賢俊と同じ文化圏にいたことが確認される。

第二百三十八段で、賢助の供の僧都の姿が見えなくなつた時、兼好はこの僧都をすぐに探し出したと自讃しているが、元弘元年（一三三二）に賢俊の師、賢助が五壇法を行った時の補佐に賢俊権大僧都の名があることに注目すると、賢俊がこの段の僧都である可能性が出てくる。

ここで、日野家と神宮の関係にも注目すると、賢俊の甥の忠光・光濟兄弟は武家の力を背景に神宮の事にも介入し、忠光は内宮正遷宮（一三四七）に、光濟は前述の大中臣定忠の孫親世の外宮造管使更迭（一三七九）に、それぞれ関わっているのである。そして、第百五十二・三段に登場する資朝は賢俊の兄である。

兼好は神宮と関係が深く、それで知り得た情報が、『徒然草』の登場人物や話に反映されたのではないだろうか。

『直談因縁集』と狂言―「磁石」の場合―

国学院大学非常勤講師 岩崎 雅彦

「磁石」は狂言には珍しい劇的な展開に富んだ曲で、大きく二つの場面から構成される。遠江国の男（アド）が都へ上る途中、すっぱ（シテ）に声をかけられ宿へ案内される。すっぱは宿の亭主（アド）に男を売り、明朝代金を受け取る約束をするが、これに気付いた男は、すっぱを装って先に代金を受け取り逃げる。すっぱが男を追って行き刀で脅すと、男は自分は磁石の精だと言ってすっぱを翻弄する。男が逃げるまでの前半（人売り説話）と、すっぱと男が再会する後半（磁石説話）は、それぞれ独立的な性格が強い。

この「磁石」の前半とほぼ同内容の話が『沙石集』（巻七の八「僻事スル物ノ酬ヒタル事」）に見えることは、大蔵虎明が『わらんべ草』（万治三年。一六六〇）で言及しており、『沙石集』の話と同類の話が「磁石」の素材となったであろうことが北川忠彦氏、田口和夫氏らによって指摘されている。ただし「磁石」の男とすっぱは、『沙石集』では二人の法師の設定になっている。

近年この類話が新たに見つかった。『直談因縁集』は天正十三年（一五八五）に常陸国最勝寺の天台僧、舜雄が書写した説話集形態の『法華経』注釈書である。二の十九話は『沙石集』の話とほぼ同内容であるが、二人の出家が出会って道連れになる経緯や、結末の亭主と法師のやりとりの描写が詳細で、会話を多く用いるなど演劇的な傾向が見られる。

『沙石集』や『直談因縁集』では、だまそうとした法師が逆に亭主の下人にされてしまう。これらは、人をだますことや食欲を戒める譬喩因縁譚・教訓譚として完結している。本来独立した説話であった人売り説話を題材としながらも、仏教説話の教訓性を除去し、だました側がだまされるという展開の面白さに着目して、後半の磁石説話に接続させたことが、狂言「磁石」の工夫であった。

源仲正の題詠歌——『夫木和歌抄』『三勇和歌集』を資料として

白百合女子大学非常勤講師 家永 香織

『桑華書志』所載「古蹟歌書目錄」によれば、源仲正には「蓬屋集」なる家集があったとされるが散逸しており、現在仲正の和歌を論じるには、勅撰集・私撰集、彼が出詠した歌合や百首歌等を参照する必要がある。中でも仲正歌二〇一首（重複歌一首を含む）が採られた『夫木和歌抄』と、新出歌六首を含む六七首が知られる『三勇和歌集』（江戸時代中期私撰集）は、散佚した仲正の家集を撰歌資料として利用していると思われる、その面影を伝える重要な作品と言える。本発表ではこの二集を資料とし、現在では証本の伝わらない仲正の組題による作品について、寄物型恋題歌群を中心に検討したい。

寄物型恋題は院政期に入ってから見られるもので、百首歌では『為忠家後度百首』『崇徳院句題百首』に整理体系化の萌芽が見られることが指摘されている。『夫木抄』からは、『為忠家後度百首』や歌会での作を除いても、二三題二三首もの寄物型恋題の仲正歌が集成できるが、これは同時代の歌人の中で群を抜いて多い数である。しかも、寄物題を構成する要素は天象・地儀・舟車・布帛・器物・動物・植物など類書的分類ができ、組題的構成によるまとまった恋題歌群であったと考えられる。仮にそれが百首歌であったとすれば、寄物型恋題百首として和歌史上ごく早い例となり、極めて重要な意義を持つことになる。

発表においては、同時代の皇后宮肥後・西行・登蓮らの恋百首（百十首）との関係や、『六百番歌合』など後代の作品への影響も視野に入れつつ、仲正が寄物型の恋題百首を詠んだ可能性を探り、その背景についても言及する。

既に指摘があるように、仲正は他に、寄物型述懐題による「法輪百首」、堀河百首題に基づく結題百首と思しき「山家百首」も詠んでいる。組題百首が整備され、寄物題が拡張、定着してゆく過程の中に仲正の作品群を定位し、題詠史において仲正が果たした役割を明らかにしたい。